

武士道

Pride of Japan

第5号
BUSHIDO

「今の日本はこのままでいいのだろうか」



武士道格言

その3「日新公いろは歌」

れ

礼するは人にするかは
人をまた下ぐるは人を
下ぐるものかは
人に礼儀正しくすることは、自分のためにもなるのです。
人にした同じことが皆自分に返ってきます。だから自分
自身に対しても礼儀正しく慎むことが大切です。

そ

誹るにも二つあるべし
大方は主人の為に
なるものと知れ
人のことを非難するにも二通りあるのです。人を悪く言う悪口と、相手の非
をいさめる諫言というものです。そのためいずれの場合もまず心で受けと
め、自分のためになるものと考え、反省するようにした方がよいでしょう。

つ

辛しとて恨み返すな
われ人に報い報いて
果てしなき世ぞ
耐え難い仕打ちを受けたとしても、相手を恨み返すようなこ
とをしてはいけません。お互いに恨んだり恨み返したりして
いると、際限なく恨み続ける生活を過ごすことになるのです。

ね

願わずば隔てもあらじ
偽りの世に真実ある
伊勢の神垣
私利私欲なく真心こめて願えば、神は分け隔てなく叶えて
下さるのです。偽りの世の中で、偽りのない真実の世界は、
神々や仏様たちなのです。

な

名を今に残し置きける
人も人 心も心
何か劣らむ
名を残した立派な人も、われわれと同じ人間なのです。
心についても、優劣のあるものではありません。だから
努力次第では、誰でも立派なことができるのです。

ら

楽も苦も 時過ぎぬれば
跡もなし 世に残る名を
ただ思うべし
楽しいことや苦しいことがあるとそれが、いつまでも続くような気がしますが、実際は
どちらか一方の時限的なもので、時が過ぎれば消えてしまふものです。だから、楽しいことが
あっても油断せず、苦しいことがあっても自分の感情や欲望をおさえて、おのれに打ち克
つことが得策です。その方が自分自身にとって名譽となる名を残すことになるのです。

む

昔より道ならずして
驕る身の 天の責めにし
遭わざるはなし
昔から、自分の好き勝手なことをして得意となり、驕りたか
ぶった人で、天罰を受けなかつた者はひとりもいません。悪事
の報いはかならず自分自身にはね返ってくるものです。たか
ら天を敬い、人を愛し正しい道を歩むよう努力しましょう。

う

憂かりける 今の身こそは
先の世と 思えば今ぞ
後の世ならん
思うようにならぬこの世の自分の姿が、前世の報いの結果だと
言うのなら、今の自分の生き方は、その結果として後の世に現
れることになります。だからこそ今を心して生きることです。

「日新公いろは歌」とは

「島津家中興の祖」、「日新公(じっしんこう)」と称された、島津 忠良(ただよし)(1492~1568年)が、5年余の歳月をかけ完成させたという47首のいろは歌。神道・儒教・仏教の三つの教えを基に、人としての生きる道、特に武士として守らねばならない道を説いたものである。薩摩藩の「郷中(ごじゅう)教育」の基本の精神となったといわれる。孫にあたる島津義弘も多大な影響を受け、その後も薩摩武士、士道教育の教典となったこの「日新公いろは歌」は、現代の私たちにも通じる多くの示唆を含んでいます。

解説文引用文献:清水榮一著『島津日新公の教え』(PHP研究所刊)

政治家は武士道に生き方を学べよ

武士道協会理事

矢作幸雄



●プロフィール
元・筑波山神社権宮司

1934年、茨城県生まれ。国学院大学に学び、1961年、大洗神社前神社権宮司、鹿島神社権宮司等を歴任。神社本庁教諭として、1983年より水戸少年刑務所に6年、茨城職業学院に20年、収容青少年の相談指導にあたる。1992年と1998年に、筑波大学大学院非常勤講師をつとめる。歴史考房回廊洞を主宰。鹿島神社宮教諭顧問、鹿島新当流彰古会顧問、鹿島神社流武道連盟顧問。
著書に「ともしび」（1962年にNHKテレビドラマ放映）、「やまとたけるのみこと」（1977年）、「古代筑波の謎」など多数。

6月2日、鳩山首相は突然退陣し、小沢民主党幹事長にも辞任を求め、小沢氏も了承して身を退いた。

わずか8カ月ばかりの政権で支持率は急降下し、普天間問題で行き詰まった。しかし、最後に見せた決断は鳩山由紀夫という人物の輝きでもあった。

鳩山、小沢の両氏の政権からの離脱によって、これから多くの政治変革が行われるであろうことは確実で、民主党支持率の低下が止まらなければ、民主党政権そのものが危うくなるであろう。

一国の政治が猫の目の如く変わるのには、決して良いことではない。地道な政権運営を行える内閣の誕生を心から願ってやまない。

この鳩山、小沢両氏の共通問題は「政治とカネ」であるという。政治は政治家であれば当然のことであって、個々の政治能力の発揮によって決定されるべきものであり、この欄で論ずるところではないが、問題は「カネ」に対する感覚の異常さである。

鳩山氏は報ずるところによれば、母親から毎月もらっていた1500万円もの小遣いに気がつかなかった人物で首相公邸に入居の折は改修等に700万円も使ったという。

政策面では子ども手当に巨額の金を支出した外、歳出は膨らみ続けて置き土産は多額の借金である。とうてい庶民の金銭感覚などは考えてみたこともないであろう。

いやしくも一国の総理ともなればその国の一番貧しい人々の生活を視野に入れていなければならないのは当然である。

この側隠の情なくしては武士道とはいえず総理の職もまた全うすることはできない。

小沢氏も政治資金規正法違反によって、秘書官三名が逮捕されながらも、自己の恥を知らず、公正にして信義を守る武士道の精神からは大きく外れ、公党の幹事長のあるべき姿ではなかったのである。

このように金銭に対しての感覚のずれは、国民と共に歩むべき政治家の考え方でありえないとこ

ろであり、鳩山、小沢両氏の行き詰まりは此処に原因があるといえよう。

これまでの政治家は、国や地方自治に専念するあまり、庶民とは別の金銭感覚を抱いていても許容されていた面もあったが、これからは政治家こそ、身を正しく保ち、国民、住民の鑑となるべき行動が要求されることであろう。

現在、外国の人々にとっても、日本の武士道日本人の心の在り方として高く評価されており、政治面でも武士道精神を重んじて、一人でも多くの国民が、そして政治家が武士道憲章を遵奉するならば、日本が精神面において世界の模範となることも可能であると言えるのではないか。

（平成22年6月3日 記）

※武士道憲章

- 一、武士道は志を尊ぶ
- 二、武士道は心の清明を希求する
- 三、武士道は公正にして信義を守る
- 四、武士道は自己陶冶に精励する
- 五、武士道は忠誠心を堅持する
- 六、武士道は剛直をもって臨む
- 七、武士道は惻隠の情を心に養ふ
- 八、武士道は礼節を重んじ、恥を知る
- 九、武士道は時の流れを超越する
- 十、武士道は天地自然の理法と共に生きる

【立志】
【清明】
【正義】
【修養】
【忠誠】
【剛勇】
【仁愛】
【廉恥】
【超越】
【自然】

西郷南洲に学ぶ武士道の心

石 平



●プロフィール
1966年、中国四川省生まれ。北京大学哲学部卒。1988年、神戸大学大学院文化科学研究科に留学、博士課程修了。「天安門事件」で友人が多数死傷し、中国共産党に絶望、日本永住を決意。「なぜ中国人は日本人を憎むのか」(PHP研究所、2002年)を著して中国における反日感情の高まりに警鐘を鳴らして以来、新聞、雑誌、テレビなどで活発な評論活動を展開して現在に至る。2007年日本国駐米大使館、拓殖大学日本文化研究所客員教授。主な著書に、「日中友好」は日本を滅ぼす! (講談社)「私は「毛主席の小戦士」だった」(飛鳥新社)「中国大逆転」(ベストセラー)のほかに多数。

日本の武士道精神といえ、その代表格の一人は、何と言ってもやはり、かの西郷南洲翁であろうと思う。実は元中国人の私が多少たりとも武士道の心を理解できるようになったのも、西郷南洲という人物の生き方と死に方を知ったからのことである。

周知の通り、幕末維新の歴史において、西郷南洲こそは、維新という回天の大業を成し遂げた最大の功労者であり、最大のカリスマであった。しかし彼には、それを利用して自分の政治的野心や私利私欲を満たそうとする考えは、露ほどもなかったように思われる。

明治新政府が成立した時、彼はその最大の功労者として高位高禄を約束されていたにもかかわらず、あっさりと、それを辞して故郷に帰り、犬と猟師と山川を相手に、野人同然の生活を楽しんだ。

「征韓論」をめぐる政争に敗れた時、彼は兵力を一手に握る実力者の立場にありながら、ク

データを起こして自らの主張を押し付けたり、自分の地位を守ったりするようなことは一切しなかった。

彼はただ潔く官職を辞して、故郷の鹿児島に戻った。そして、純粋な青年たちと起居をともし、芋飯を常食とし、昼間は自分で肥料桶を担いで農耕に励み、夜間は学問をして過ごした。新政府に請われて官職についた時にも、簡素な着物に兵児帯という文字通りの弊衣を身にまとい、茅屋に住むという質素極まりない生活を送った。

中国の歴史上では、政略家としての西郷南洲以上に、権略詐術を駆使して、一世を圧倒するような英雄豪傑を、いくらでも輩出した。

しかし、それらの英雄豪傑は、日本の西郷南洲のような無私にして高潔の士は、ついに、一人も出なかった。英雄豪傑であればあるほど、個人的な権勢や一族の栄達を求めて独裁者への道を歩んでいくのが中国の歴史の常であった。

権力は決して、私利私欲の限界を超越することができない。それこそが中国社会の法則であり、中国の歴史の不幸の源でもあった。

しかし日本の西郷南洲は、それを見事に超越した。

日本史上最大の政略家でありながら、この世の権勢や栄達富貴がいくらでも手に入れられる立場にありながら、彼はどこまでもその高潔無比、清誠純一の生き方を貫き、どこまでも「一点の私心もない光風清月の人」(伊藤博文)であり続けた。

後に犬養毅が評したように、西郷南洲こそは、その一生において、「まったく彼我の見、利害の念を離脱した心境に到達した」人物であるが、彼は一体どのようなしてこのような心境に達することのできたのであろうか。

西郷南洲の人格形成のプロセスを見ると、彼はまた、当時の武士たちと同じように、いわゆる儒教教育の中で育った人間であった。薩摩

藩獨特の郷中教育を通じて、あるいは藩校の造士館での教育を通じて、彼は儒教の經典である四書五經を熟読し、人並み以上の儒教的教養を身につけた。その後、薩摩藩により沖永良部島に流された時、彼はまた、陽明学者の川口雪簫の指導を受け、陽明学及び儒学への理解を深めた。

彼は参禅もした。故郷にいた19歳から25歳までの間に、西郷は地元の傑僧といわれた無参禅師に参じて、曹洞宗を学び、厳しい禅の修行を重ねた。

彼はまた、漢詩の作り手でもあった。その四八四篇の自作漢詩の中で、彼は中国古代の莊子や陶淵明などの高潔の士にたいする傾向を吐露している。

「雪に耐えて梅花麗しく、霜を経て楓葉丹し」という彼のこの一句には、元中国人の私が深い感動を覚える。

言ってみれば、儒学を学び、禅に参じて漢詩を詠む、この典型的な日本武士は、いわゆる東洋的教養人の典型でもあった。武士の魂と儒教の理念と、禅の境地が結合して渾然一体となつて、西郷南洲という高潔無比、純一至大の人格を作り上げた。

そういう意味では、彼こそは、この東洋の世界が古来から求めつづけてきた、もっとも理想

的な人格の持ち主である「君子」そのものである。

西郷南洲という、この円熟にして完璧な人格において、彼が貫いたその高潔無比の生き方において、儒教はその「修身齊家治國平天下」の理想の実現を見いだした。いわゆる東洋的理想が、そのもっとも相応しい具現者を得たのである。

そして、その人生の最期の時、政府軍の弾雨の中、「もう、ここぞやか」の淡々たる一言を發して、従容として最期を迎えた。彼はもっとも武士らしい死に方をもつて、その日本武士の魂の真骨頂を見せた。彼はこれで、武士としての人生を見事に完結させ、自らの生と死をもつて、もっとも理想的な武士像を完成させた。

高潔にして清廉潔白、名利に淡泊でありながら使命感に燃え、思いは常に天下國家と万民のためにある。生前はどこまでもその清らかな生き方を貫き、死ぬ時には潔く世を辞する。西郷南洲によって具現化されたこのような人間精神は、まさに武士道精神の真髓たるものであろう。

しかし残念ながら、戦後六十数年にして、日本の誇るべき武士道の精神は、徐々にこの日本という国から消えていく。官僚は天下國家を担おうとする気概を失い、自らの保身と天下り先の確保に走ってしまう。政治家たちはとくに

カネと票数の亡者となつてしまい、人気取りの国内政治と弱腰の対外外交を行う以外に能のない人種となつていく。そして国民の多くもまた、国民としての自覚や國家意識をどこかに捨て置き、武士道とは無縁の矮小化した「商人社会」の中に身を委ねている。社会全体はいつの間にか、節度も清らかさも忘れ去られたような殺伐した世の中となつていく。

政治、經濟、社会のあらゆる面において心と精神が失われて退化しつつあるというのは、まさにわが日本國のおかれている現状そのものであるが、それに加えて近隣の一黨独裁の大国からの脅威が日にまして迫つてきている。そのままいけば、日本はいずれ亡國の道をたどつてしまうことになるのだろうか、この憂すべき美しい日本を破滅から救い出す方法は一つしかないであろう。

それはすなわち、われわれ日本人自身は、かつての日本先人たちが有するところの武士道の精神、すなわち日本の精神を取り戻してより良き日本人、より強き日本人になることである。

まさにそれがために、われわれは今一度、かの西郷南洲翁から、本物の武士道精神を学ばなければならぬだろうと思う次第である。



特別寄稿

「教育に生きていた 武士道」に参加して

株式会社誠心堂薬局

代表取締役

西野 裕一



シンポジウム「教育に生きていた武士道」にパネラーとして
(右から二人目)

私にとっての武士道とは「君に忠、親に孝、自らを節すること厳しく、下位の者に仁慈を以てし、敵には憐みをかけ、私欲を忌み、公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなす」と考えている。武士道には慈愛心と自尊心との融和があると思う。

漢方薬剤師として日々臨床で患者様の相談を受けるにあたり、その難しさを痛感する。それ故、社員教育にも武士道を取り入れて日々勉強中である。

相手の話を傾聴する姿勢は医療人として基本の姿勢ではあるが、相手が話した内容を自分がどこまで理解できたかは不確かである。また、自らの話を相手がどのように聴いているのかは想像を絶する。医療の現場ではそのような出来事が日常茶飯事におこる。



●プロフィール

1957年、島根県生まれ。北里大学薬学部卒。

(株)誠心堂薬局代表取締役、中国漢方普及協会会長。

日本で医師や中医学アドバイザーたちと新しい漢方薬の有用性を啓発。上海医薬大学医学部、雲南中医药大学医学部などと学術交流を持ち、アトピー・性皮膚炎・不妊症の多くの症例を持つ。主な著書に『中医学・美肌ハンドブック』(こま書房)、『漢方スキンケアでかゆみ・ジュクジュクが消えた』(現代書林)、新刊『漢方の力』(ラフ社)がある。



相手が聴こえたことが自らの発した言葉であると認める心が武士道に繋がると私は考えている。自らの思い上がりを抑える克己心と相手に対する尊敬や謙虚な心が医療の現場には求められる。最近気になるのは、弱さとやさしさを履き違えている人が増えていることである。謙虚であることと自分の意思がないことはまったく違うはずである。もしも、お互いの立場や見解の相違があるならば、それを明確するための勇猛心も武士道にはあると思う。今の日本人が大切にしなければならないことが、数多く武士道に残されているのではないだろうか。

特別寄稿

儲けさえすれば何をやっても良いのか？ ビジネスにも必要な武士道

(株)USP代表取締役 加藤洋一

近年、産地偽装に代表されるように倫理感が欠如しているビジネスが氾濫しているように思います。

このようなビジネスの在り方は、短期的にはうまくいくことがあっても、長期的にうまくいくとは思えません。金銭的な成功はともかく、内面から充実する成功はないと思っています。このような背景から、ビジネスの世界にも、日本人が過去から大切にしてきた価値観「武士道」が必要だと感じています。

私は、中小企業のブランド戦略を専門領域とするコンサルタントです。企業が生み出した商品やサービスが安売り競争に巻き込まれないよう「見えない付加価値」ブランド」を築くお手伝いをしています。中小企業に低予算で、効率良く、お客様の頭の中にブランドを築いていくためのアドバイスをしています。

効率よくブランドを築く方法として「不易流行（ふえきりゅうこう）」という考え方があります。「不易流行」という言葉は、松尾芭蕉が俳句の理念・哲学にしていたそうです。「不易」は「不変性」であり、「流行」が「時代性」ということになります。ブランドを築くためには「不易」の部分の整理が大変重要なのです。

海外から見ても、日本が誇るブランドの一つに「サムライ」があ

ります。そのサムライブランドを築いてきた「不易」の部分は、武士道ということが言えるのではないのでしょうか？ 私たちが守るべきもの、変えてはいけけないものとして「武士道」を未来の子供たちへつなげていくべきだと思っております。

時代が進むに連れて変えていって良いことは「流行」の部分です。ですから、子供たちの個性に任せても良いのだと思います。しかし、「不易」の部分である「武士道」はきっちり伝えていかなければならないのです。そうでなければ、日本の誇るブランド「サムライ」が失われてしまうのかもしれない。

初めて武士道協会の会合に参加させていただきました。その必要性を改めて痛感しました。微力ではありますが、協会の主旨に賛同し、武士道を広めていきたいと思っています。



プロフィール

1971年、愛知県岡崎市生まれ。経営コンサルタント。小さな会社のブランド確立に重要なUSP(独自のウリ)の専門家。規模・業種を問わず、短期間で地域、業界No.1ブランドに育てている。主な著書に『小さな会社がNo.1になれる「アップランド戦略」(PHP研究所)がある。

<http://www.katoyoichi.com/>



特別寄稿

桜に宿る武士道のDNA

舞台「帰って来た螢」公演に向けて

武士道学校講師 白石茂樹

「敷島の 大和心を人間はば 朝日ににほふ 山桜花」

新渡戸稲造は名著『武士道』の中で、本居宣長の詠んだこの歌を、「日本人の純粹無垢な心情」を示す言葉として紹介しています。また、靖国神社遊就館の展示室「武人のこころ」に入場すると、真っ先に目に飛び込んでくることでも有名な和歌です。

そして、昭和19年10月、レイテ沖海戦で編成された最初の特攻隊「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」の命名もまた、この歌によるものです。

特攻散華された多くの英霊が「靖国で会おう」と契り合い、その「桜」の下で再会を果たされたに違いありません。「潔く」「気高く」散っていった英霊は、まさに「桜花」そのものであり、今を生きる私たちに「大和心」の誠を遺してくれました。

武士道は宗教的観念を超越した徳目、価値観であり、それを伝える継ぐものは「日本人の魂」にしかなく、桜の中に宿る至純の民族精神とも言えるでしょう。

決して忘れてはならない「悠久の大義」に生きた若者たちの「死に様」が、今を生きる私たちの「生き様」と「責任」を問うているように感じます。

私自身、日常に流され、仕事に追われる日々……。しかし、桜の

散る季節だけは、しっかりとくつきりと彼らの「死に様」を思い、自らの日常を恥じます。また、多くの日本人にそれを伝えたい、感じてほしい、という欲求にもかられるのです。

そして、ようやく本年7月、舞台「帰って来た螢」の上演を実現できることになりました。この作品は陸軍知覧特攻基地から出撃した特攻隊員たちと、特攻の母と呼ばれた島濱トメさんとの交流を描いたもので、トメさんの二女赤羽礼子さんの著書『ホテル帰る』が原作となっている実話です。役者は、トメさん役に二宮さよ子さん、その脇を、NHKドラマ『坂の上の雲』にも出演する川野太郎さんと堤大二郎さんが固める、重厚な布陣となっています。

私は桜を見ると、「日本人なんだなあ……」としみじみ思います。

満開の桜よりも、散ってゆく桜の花びら一枚、一枚、揺らいでは地に還るその様を見ていると、自身のからだの奥底からやむにやまれぬDNAが疼きますのです。

それは、「国を護りたい」という愛国心と

はまた違う意味での「大和心」へのシンパシーだと感じます。

舞台の稽古が始まり、役に入っていく若い特攻隊員の所作動作からは、戦術や謀事とは無縁な「至純の武士道」すら伝わってきます。きつと、「武士道」という光は、「桜」という大和心を通して、日本人の道を照らし続けてくれるのだと思います。

この舞台公演により、ひとりでも多くの皆さんに「至純の武士道」を感じていただき、桜の季節がくるたびに、彼らの「死に様」を思い出していただきたく存じます。

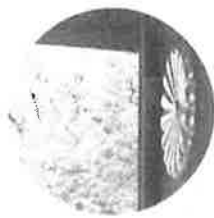


●プロフィール

1964年、福岡生まれ。関西学院大学卒業。

横浜市役所、議員秘書を経て、現在、日本警備防犯協会常務理事。

著書『武徳教育のすすめ』（展転社）



特別寄稿

武士の夢

アブドゥラシイティ アブドゥラティフ

日本に留学前から日本の時代劇が好きでした。

大学の先生のおかげで、『七人の侍』、『用心棒』、『座頭市』など名作を見ることができ、非常に感激したことを覚えています。来日後、日本人の歴史作品に対する愛着に驚きました。店頭にたくさん時代小説や歴史マンガが並び、立ち読みする姿がよく見られます。毎年NHKが放送する大河ドラマも人気が非常に高く、どの役者がどの配役を演じるのか、どんな視点から物語を語るかに人々は大きな関心を寄せています。古い日本語の表現に慣れない私も、興味津々に見ております。その中で、私がつとも好きなのはやはり戦国時代を舞台にした物語です。

数多くの武将が乱世に登場し、愛と欲望、忠誠と裏切りに満ちる世の中に、幸せを求め、逆境と苦闘しながら生きていました。彼らはそれぞれの足跡に沿って異なった人生を駆け抜けたのですが、その生涯を眺めてみると、不思議な共通点を持っています。それは、人生を「夢や幻の如し」とする感覚です。

「四十九年 一睡の夢 一期の栄華 一盃の酒」。上杉謙信は、その生涯を戦いに明け暮れました。彼は関東平定へ出陣しようとした直前に、病に倒れてこの世を去りました。一生が一眠りの夢のようで、天下に名を馳せた二代の栄華も、一杯の酒ほどの楽しみでしかなかったのでしょうか。

「人間五十年 化天の内をくらぶれば 夢幻のごとくなり 一度生を得て 滅せぬ者のあるべきか」。天下統一へ向け、進撃を続けていた織田信長は、四十九歳で、部下の明智光秀に殺されました。この世にひとたび生まれてきて、滅びないものがあるのでしょうか。この一節を好んで歌った信長は、常に疑問を持っていたのでしょうか。

「露とおち 露と消えにし わが身かな 浪速のことも 夢のまた夢」。立身出世の夢を果たし、思うままに振舞った豊臣秀吉は最期に意外な言葉を残しています。全力で地位、名誉、金銭などを追い求めてきた一生は、夢の中で夢を見ているようなはかないものだったのでしょうか。

すなわち、人間の一生は夢か幻のようにあつという間に過ぎ去る、というのが共通の感傷のようです。人生のむなしさが強調されて受け取られがちですが、私は、一度きりしかない人生であるからこそ、後悔しないために生きがいを探求しなければならぬ、という自覚の反映のように思います。日本人がよく口にする「頑張る」という言葉も、この武士の夢とどこかにつながっているのではないのでしょうか。

五年前、日光の東照宮に修学旅行した時、徳川家康の遺訓を掲げた札が目に入りました。「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず」。自分なりの夢を見つけて、こつこつ向かっていくのが最も大切なことであると信じています。



●プロフィール

阿不都熱西提 阿不都勒提甫（アブドゥラシイティ アブドゥラティフ）。新疆ウイグル自治区出身のウズベク人。中国西北民族大学卒業。7年半教官として勤める。2003年4月来日。2004年4月に京都大学へ入学。現在、博士課程在学中。来日以来シルクロードと日本に関する様々な交流活動に参加。2007年6月京都府名誉友好大使に任命され、現在大使委員会長として、シルクロード（中アジア諸国、中国）と日本の交流に活躍中。

現代社会に武士道を 生かすためには

特別協賛委員の皆様からのご提言

香川県 宮本章壽

長かった小・中学校の教員生活が定年を迎えようとしているとき、『PHP』の理事長、塩川正二郎氏の武士道についての論説文に共感し、早速入会した。その後、5月から京都会場に参加し、毎回魅力ある内容に引き込まれていく自分を実感することが分かった。

そして、これからの生きる指針にしたいと考えようになった。

ところで、卒業生への「はなむけ」の言葉として、式辞の中で一番多く引用した言葉は、宮本武蔵の『五輪書』（1645年頃完成）と孔子（紀元前552年〜479年）の教え『論語』からであった。

それは、高い志をもち、自己陶冶に生涯をかけたものであり、その生き方や考え方に憧れ、子供たちにも参考にして欲しいと願ったからである。

最近の社会や学校を取り巻く家庭の情勢は、自己中心的な言動を主張し、道徳観の希薄化さらには自己責任の放棄等をはじめ、日本古来の精神文化を忘れかけており、日本人としての誇りや美意識はどこへ行ってしまったのかと嘆くことが多々ある。そんな時、その道を極めた人の言葉には、惻隱の情を心に感し、天地自然の法則とともに生きたものであり、私は共感を覚え、自分も見習い

たいと思うものである。

また、江戸末期に、世界の大国が武力で日本を植民地にするか属国にするかと押し寄せてきたとき、諸外国の使節は、日本人の誠実さや礼儀正しい生活態度を見て、このような立派な国と国民は未だかつて見たことがないと感じ、紳士的な外交を申し入れたそう。

これらの日本人の態度は、日常生活の中から長い時間をかけて、感得し、身に付けてきた心の持ち方、振舞い方、考え方が醸成されたものである。その源泉は、神道、儒教、仏教にあり、「武士道」といわれる明確な精神的規律と考えられている。

おりしも、体育の授業で武道が取り入れられるようになった。これは大変喜ばしいことである。設備・備品等を整えるための経済効果があり、指導法の研究により、指導力の向上効果もある。しかし、一番期待することは、指導者が武道の精神を理解して指導に当たることであろう。「武」という文字は、「戈を止める」と書き、勇気のある人、私利私欲のない行いのできる人、という意味がある。「道」とは「人の生き方を追求する」ことである。

したがって、武道とは「戦いのない、平和な世界を創るための生き方を追求する」と考えられる。技と型にとらわれることなく、日本人の心を育てることに意義を見出せば、武道が生きた授業となり、将来の日本が明るくなることに期待がもてる。

もちろん、武士道精神は武道の授業のみで教えられるものではないが、一番身近な教材としては最適である。体育の授業を通して、「スポーツマン

シップ」を身に付けさせることが大事にされるべきであろう。

しかし、本来の武士道精神は、親から子へ、子から孫へと引き継がれたものであり、日常生活の中で振舞う美しい姿はたくさんある。まず、大人や親が偽りなく、常に本気で生きている姿を子供に見せることであろう。山本常朝の書いた『葉隠』の巻頭にある「武士道とは死ぬことと見つけたり」と言う一節がある。これは、死ぬ気になってやればできないことはない。日々懸命に生き抜くことである、と説いている。

武士道の勉強に一歩踏み入れたところであり、毎回の講義で、今までの勉強不足を痛感しているところである。もう少し早く出会っていれば、日々の教育活動に自信をもって生かせることができたのではないかと思う。今後は、日常生活において日本人の心をまわりの人に語りかけたり態度で示したりしていきたい

東京都 阿久根 理

近年の日本経済の低下と不況、それに伴う雇用の悪化、それにつながる犯罪やモラルの低下には目に余るものがあります。

何よりも危惧しているのが、日本人として当たり前であった礼儀、道徳がますます喪失されていく点です。

これには、世界経済がグローバル化したため、

日本固有の終身雇用や政府の手厚い保護がますますなくなり、企業間の競争はおろか、企業内でも激しい生き残り競争が促進され、働く人に余裕がますますなくなっていることも大きな原因かと思われまます。

さて、このような時代に私たち日本人は何を目指して生きていけばいいのでしょうか。このまま経済のグローバル化に巻き込まれて、激しい生き残り競争を、人間性を失ってまで続けるべきなのでしょうか。かといって、江戸時代のような鎖国でもするのか、戦前のようなブロック経済にするのか、まったく将来を描けないのが現実です。

そのような時は、過去の教訓から学んでみるのもいいのではないのでしょうか。

振り返れば、日本の歴史には大きな転換点がいくつかあります。

一つは平安末期から鎌倉時代までの武家政権の成立。二つ目は秀吉の天下統一から家康の江戸幕府成立にいたって、士農工商の身分が固定化され、武士が官僚化したこと。三つ目は明治維新により天皇を中心とした立憲君主国になったこと。

いずれにも「武士」という古来日本になかった階層が主役となっており、これが日本の歴史を他国と大きく異質にしている要因になっています。

いずれの体制変革の力にもなった武士とは何か？

武士道と言えば、新渡戸稲造が有名ですが、ここではあえて、前記変革の立役者である、源頼朝、関東武士団、豊臣秀吉、坂本龍馬、西郷隆盛……彼らはこれまでの風習を打ち破る革新的なエネ

ギーと知恵によって、次の時代を作り上げました。そして、彼らがいずれも、武士であり、しかも決して恵まれていなかったというところに注目したいと思います。

源頼朝は源氏の御曹司のように思われがちですが、平家の時代になってからはただの犯罪者として囚われの身であり、関東武士団は公家や平家に搾取される立場にあり、豊臣秀吉に至っては本来武士にはなれない生まれにありました。坂本龍馬は武士ですが、土佐藩の山内家から見ると土着の下級武士にあたり、上士からの差別にあっていた。

それでもこれだけの変革をやったのは、「死ぬ覚悟」があったからこそだと思ふのです。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」と有名な言葉がありますが、これの本来の意味は、何事も死ぬ覚悟をもって全力であたれという意味であって、死ぬという意味ではありません。今の日本人に、これだけ気概のある人がいったいどれくらいいるのでしょうか。

今の時代を乗り切るためには、彼らのように、「死ぬ覚悟」で何事にも取り組んでいくべきなのかもしれません。

臆病になつてはいけません。生活レベルが下がるのを恐れてはいけません。リストラを恐れてはいけません。それよりも、全てにおいて死ぬ覚悟であたつて、満足な人生を置くことこそ、今後の日本人が生きていく道なのかもしれません。

協会認定特別協賛委員のご紹介

現在、左記の26名の方に、協会認定の「特別協賛委員」としてご活動いただいております。

茨城県 鎌田 敏、中島誠吾

栃木県 植野芳彦

群馬県 田沼昇一

千葉県 竹下健一、藤倉靖之

東京都 阿久根 理、江見明夫、唐澤靖治

神奈川県 トウランジャン麻子・三原

静岡県 木村治司、柴田宏祐

愛知県 山口達也

京都府 岡本和徳、加藤駿吾

大阪府 桜井 潤、桜井晴子、鈴木祥浩、高垣 博

兵庫県 中島省悟、藤原孝弘

広島県 橋本祐一

香川県 宮本章壽

都道府県順・五十音順 敬称略

*5月15日(東京)、16日(京都)で、第1回特別協賛委員会を開催させていただきました、委員会地区役員が決まりました。

関東地区…

〈委員長〉 江見明夫

〈副委員長〉 鎌田 敏、竹下健一

トウランジャン麻子・三原

関西地区…

〈委員長〉 高垣 博

〈副委員長〉 岡本和徳、桜井潤・晴子 (敬称略)

*特別協賛委員については、最終ページをご覧ください。

半端な汚れではない 中国のトイレ

武士道協会 理事
かざやま ひでさぶろう
鍵山秀三郎



掃除と武士道、どのような関係があるのかと思う方もいらっしゃるかもしれません。それは、責任、後始末というところでしっかりと結びついていることをこれからお話ししたいと思います。

自分の排泄したものを、次の人の迷惑にならないように後をきれいにしていく、これは人間として生きていく上で、最初に覚える責任です。自分の排泄物を自分で処理するのは人間だけです。他の動物は垂れ流しです。人間も赤ちゃんは排泄物を大人に始末してもらいます。でも、だんだん年齢を重ねると、自分で後始末をするように躾けられます。

自分のしたことに責任を果たす、生まれて最初の責任です。食べたお茶碗を片づけるより、自分の来た洋服を洗うことより、何よりも初めに排泄物の後始末、トイレできちんと排泄をして流すという責任を果たします。これは、自分のことで他の人に不快な思いをさせないという配慮からであり、立派な武士道精神なのです。

中国に旅行された方はご存知だと思います。中国のトイレは、日本と比較にならないくらい凄まじい汚れ方をしています。水洗便所なのに「これが、水洗便所？」と疑いたくなるような汚れ方です。この現象は、自分さえよければいいという考え方が非常に強いから起きるのではないのでしょうか。それは、トイレで用足したあと、どうして私が後から利用する人のために水を流さなければいけないのだということになるからです。そんなものは「次に利用する人がやればいい」という理屈で、そのまま出ていきます。

ところが、次に入った人は、どうして前の人のものを自分が流さなければならぬのだという理屈ですから、さらに、その上に用足しをして出ていきます。かくして、トイレは次々に山盛りになるばかりです。いくら私たちが慣れていいといいますが、この山盛りを片付ける作業から始めなければならぬのは、思わずギョッとして一瞬腰が引けるほどたいへんなものです。

中国の大学構内で、学生と掃除したときも私のうしろでは、中国の学生たちが固唾を呑んで見守り、さて「掃除の鍵山」は、この状況とどう取り組むのか？ といわんばかりに興味深く見えています。背中に熱い視

線が伝わってくるのがわかります。私は、もうあとに引くことはできません。意を決した私は、一気に山盛りの糞尿を素手で便器に押し込み、水で流しました。そのうえで、静かに振り返り、「さあ、あなたはここをきれいにしてください」と一人ひとりに掃除するトイレを割り当てていきました。ここまで私が率先垂範すると、学生たちも懸命にトイレ掃除と取り組んでくれました。もし私が、手本を示さずに口だけで掃除を割り振っていたとしたら、彼らはきつとやらなかったと思います。何事始めるにも、人がもつとも嫌がることを、まず自分が引き受ける。このことが、人を動かしていく前提だということを改めて学ばせていただいた体験でした。

このことは、民族、国家、老若男女、いっさい関係ありません。「たいへんだらうなあ」「気の毒だ」「手を貸さずにおれない」——周囲の人がそう感じるくらい率先垂範しないことには、自分の思い通りに人は動いてくれません。私がこれまでの人生で学んできた心理でもあります。

リーダーの方、役職を頂いた方で、部下や後輩の指導方法がわからない、あるいは、部下や後輩が言うことを聞いてくれないと思っていられつしやる方は、どうかご自身が率先して一番辛い仕事、汚い仕事と感ぜられることに取組んで、手本を見せるようにしてください。きつと一番辛い汚い仕事だと思っていたことから、一番感動と信頼を得ることになるでしょう。これが武士道精神だからです。

●プロフィール

(株)イエローハット取締役相談役

1933年、東京生まれ。1952年、疎開先の岐阜県立東濃高校卒業。1953年、デトロイト商会入社。1961年、ローヤルを創業し社長に就任。1997年、社名をイエローハットに変更。1998年、同社取締役相談役となる。創業以来続けている「掃除」に多くの人が共鳴し、近年は掃除運動が国内外に広がっている。

「日本を美しくする会」相談役。

著書に『凡事徹底』『鍵山秀三郎語録』『小さな実践の一步から』など多数。



武士道協会の会員になって

櫻井晴子

「親」。私は6歳の息子を持つ母親です。

「親はお客様ではない」。息子が先日まで通った幼稚園で言われた言葉です。「ハッ」としました。子どもを幼稚園に入園させた時は、気持ちが減入って弱っていた時期でもあり、「自分の時間ができてちょっと楽ができる」と幼稚園に対してお客様気分でしたからです。人を一人育てる責任を軽く受け止めていました。

「目覚めの時期」。今振り返ればここ2～3年は、私の中の「なにか」が目覚めた時でした。「なにか」が何なのかは解りませんでしたが、私の追求が始まりました。

読書、講演会、寺社巡り、芸術鑑賞……。やりたいと思ったことを片っ端から経験していきました。そして見えてきたのは、人が生きていく上で一番大事なことで、それは「正しい道を求めながら、実りのある生き方をする」という、あまりにも当たり前のことでした。

正しい道を求め、精一杯努力をして、その上で一人ひとり個性の違う人間が、それぞれに合った生き方を見付けること、それを導いていくのが「親」の役割だと思いました。

自らが学び、それを子どもに伝えていく……。人間のそういった行いが、伝統や文化、風習を作りあげたのではないのでしょうか。

そしてそれらが積み重なったもの、それが「歴史」を作っているのだと思いました。

「アイデンティティ」を確立するには自国の歴史を学ぶ必要があると聞いたことがあります。

では「アイデンティティ」とは何か？ よく耳にするがいまひとつ解らなく、辞書を引いたら色々な解釈がありました。

「自分は何者であり、何をなすべきか」という個人の心の中に保持される概念”。これが最近使われる「アイデンティティ」の解釈のようですが、ピンと来ませんでした。

ある時TV番組「テレビタックル」で、国籍の違う出演者達が討論をしていました。あの番組の出演者なので、個性の強い方ばかりでしたが、その個性はどのようにできあがったのか？ 一人ひとりで性格の違いはあるものの、民族性や国籍柄といったものが影響しているのではないかと。では日本人の考え方や行動の元になっているもの、それは何か？ 日本語で話し、日本の気候の中で、日本の土地で生きて、ごく自然に自分の中に染み込んでいる日本的なもの。その染み込んでいるものこそが、「歴史」なのでしょう。

「自分は何者で、自分は何がしたいのか」それを追求し、「これこそが本当の自分だ」といった実感、それが「アイデンティティ」なのだと、やっとピンときました。

アイデンティティの確立に必要な自国の「歴史」、そして現在の自分たちの歩みがやがては「歴史」になる。

その大事な「歴史」は今どのような扱いを受けているのでしょうか？ 日本という国とその歴史について、現在の教育ではきちんと教えていないと思います。敗戦後で教えたくても教えられなかった時期ならともかく、GHQはとうの昔に去り十分に国が発展した現代、なぜ教えないのか？ それどころか、日本は劣っている、悪いことをした民族、天皇は民主主義的でないなどと言われ、国家を愛する心を薄れさせる考えが「アイデンティティ」を形成しつつあります。(本当に悪いところは反省が必要だが、他国が故意的にその国の国益のために利用している部分があるのではないかと？)

先人たちの知恵や試行錯誤でできあがってきた「歴史」を蔑ろにしているのは、いくら科学が進んで経済が発展しても、それを使いこなせる人がいなくなってしまう。

世界の様々な国や民族が何千年もの間作り上げてきた文明の歴史、そしてこの日本では2670年間途切れることなく皇室があることで、連続した歴史が今日も続いています。

誇り高く日本の国柄をよく表しているもの……。数年間色々学んで直感的に「武士道」に辿り着きました。

なぜ「武士道」なのか？ 自分でもまだ解りません。でも今は自分の直感を信じて、武士道を追求していこうと思っています。

「正義は勝つ」「正直者がバカを見ない」、そういう世の中でなければ子どもに道徳は身に付きません。私たち大人が世の中を良い方向へ軌道修正し、子どもの心にたっぷり栄養を与え、困難にめげない強さと、しっかりした道徳観を身に付けさせたいと思います。

親の私も負けずに自分を磨いていきます。自分自身が実りのある生き方をするために、そして子どもを導くという親の役目を果たしていくために。





オーストラリアで、武士道協会の講演DVDを観て

原田彩音 (オーストラリア・アデレード大学2年 愛知県豊田市出身)

オーストラリア、アデレードで日本人留学生に道德・倫理を教えておられる「一燈塾」の池田實先生より、武士道協会講演会DVDを観た生徒の感想文をお寄せいただきました。この感想文は会員の川腰ナミ子様を通し頂戴いたしました。

武士道協会のDVDを観て、改めて私がどれほど日本のすばらしさに気づいていないのかを認識させられました。そして、日本人として、誇れるもの、持ち続けていかねばならないものが何なのかも発見することができました。

私は、武士道についてまったく知りませんでした。ただ、武士の人の生き方くらいにしか捉えていなく、その道の深さ、大切さやそれが日本人の精神と言われていることを知ろうともしませんでした。

武士道は、日本人として、どうあるべきか、日本人の生き方だと思います。武士だけが持っていた精神ではなく、庶民も同じような精神を持って生きてきたことから、誰でも武士道の精神を持って生きられることが分かります。心の持ち方、礼儀、勇気、忠誠、相手を思いやる……それは限りなく多く、その生き方こそが本当の人間としてのあるべき姿だと思います。

武士道は、「人格を完成させる」「徳を持った人になる」ためにありました。やはり人格を磨くこと、人間性を高めることは昔から変わっていない、人として大切なことでした。講演者の方は、「日本が成功したのは武士道の精神と徳のおかげ、日本の唯一の資源は徳」とおっしゃいました。武士道や徳はそれほど強い力を持っているのです。

さて、しかし、今の日本人にこういった精神は残っているのでしょうか。オーストラリアに来て、倫理道德を学ぶまでは、私には全くありませんでした。人に迷惑・心配をかけても平気でわがまま。とてもかけ離れたことをしていました。今は少しずつ勉強して学んできていますが、まだまだです。自分の損得にかかわらず、人のために尽くすことも100%実行できているかと聞かれればそうではありません。まだ、自分勝手なことも多いし、感謝の気持ちも足りません。

しかし、これからも努力し続ければ成長できるはず。そして武士道のようなすばらしい精神を身につけ、それをまた教えていくことができます。

やはり、今の日本に必要なのは、徳の教育だと思います。日本人として、人間として、大切なもの、そして誇れるものを学んでいかなければならないと思います。これからの時代、日本はもっと厳しい問題に直面すると思います。しかし徳が身につけていて、国民が団結して乗り越えようとすれば、どんな困難にも立ち向かえるでしょう。私はそう願います。

今、私ができることは、まず自分自身を成長させ、人格を磨くことです。そして日本人として世界に誇れるものを学んで、日本のすばらしさをいろいろな人に伝えたいと思いました。



【投稿募集】 あなたの武士道に関するご意見を事務局までお寄せください。

- 字数：250字程度
- 住所・氏名〈ふりがな〉・年齢・職業・電話番号を明記（匿名希望の場合は、その旨も明記）
- あて先 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内 武士道協会事務局 読者投稿係
- FAX、電子メールでの応募も受け付けます。なお、原稿はご返却できません。また、内容を損なわない範囲で修正させていただきます場合もありますので、ご了承ください。

※個人情報厳重に管理し、必要に応じた利用以外には使用いたしません。

●活動報告

2周年シンポジウム

2月7日武士道協会発会2周年記念シンポジウムをPHP研究所東京本部2階にて開催いたしました。渡部昇一副理事長の基調講演では「教育に生きていた武士道」と題して、和歌に謳われている武士道精神についてのお話を詳しく頂戴いたしました。日本の伝統文化である和歌も、今では学校教育で取り上げることが大変少なくなり、馴染みの薄いものとなっておりますが、改めて渡部副理事長自らの歌をご披露いただき、歌によって脈々と日本人は心と歴史と教育を伝え育んで来たことが分かりました。新たな貴重な視点を与えていただき、何よりも渡部副理事長が日本を愛し、日本を大切に思っているお気持ちがひしひしと伝わってまいりました。

引き続き、塩川正十郎理事長、渡部昇一副理事長、安岡正泰理事、会員から西野裕一(株)誠心堂薬局代表取締役社長、同じく会員の有川量崇日本大学松戸歯学部専任講師の5名をパネリストに迎え、本多百代常務理事兼事務局長がコーディネーターを務めてシンポジウムが開かれました。100名を超える参加者と共に武士道に対する学びを深め、武士道協会が求められている社会的存在価値を改めて会員の皆さま方と共感しあいました。

開会前には、ヴァイオリン(本多梨紗子)・チェロ(吾妻知奈)・ピアノ(谷脇瑛子)の女性トリオ「レ・ベル・フルール」による美しい心休まる三重奏がありました。

MPD法人 武士道協会 講演会



基調講演をされる
渡部副理事長



パネラーの皆さま



熱心に話を聴く
参加者の皆さま

定期講座〈3回〉

3月～5月の3カ月間にわたり、毎月1回東京と京都で開催されました。

- ・3月27日 矢作幸雄理事による「やさしく学ぶ：祝詞の教え」
- ・4月17日 安岡正泰理事による「やさしく学ぶ：論語の教え～弟子を諭す言葉～」
- ・5月15日 田中成明理事による「やさしく学ぶ：お経の教え～お釈迦様と弟子の会話～」

を各3時間、集まった熱心な会員さんたちと共に、日本の宗教を学びました。

祝詞の教えでは、参加者全員が世界に一つしかない“マイ祝詞”を作成しました。そして、この世で一番簡単な祝詞は「祓給閉清米給閉守給閉幸閉閉」(ハライタマヘ キヨメタマヘ マモリタマヘ サキハタマエ)ということを知りました。神社で拍手を打った後にこの祝詞を奏上してからお願い事をしたほうがより叶うようです。

論語の教えでは、全員で論語を素読いたしました。心地よい響きでした。毎日素読を繰り返していると、心の強い責任感のある人になれるかもしれない……と密かに思いました。「巧言令色鮮仁(こうげんれいしよくすくなしかなじん)」さあ、皆様も素読をしてみてください。

お経の教えでは、法句経(ダンマパダ)を学びました。ブッタン、サラナム、ガチャーミ。ダンマン、サラナム、ガチャーミ。サンガン、サラナム、ガチャーミ。という三帰依など、教えていただかなければ解らないことが解り、先ず世の中を変えなければ自分が変わらねばならないという大切なことが理解できた貴重な講座でした。

先生方、本当にありがとうございました。そして、ご参加くださった会員の皆様、ありがとうございました。

もっと詳しく学びたい方は、当日撮影編集したDVDを用意いたしておりますので、代金(頒布価格1000円)を 銀行口座 [三井住友銀行四条支店(普)1860756] あるいは、郵便振替 [00940-7-253973]へお振込みのうえお申し込みください。



安岡理事



矢作理事



田中理事

武士道協会

あゆみ

- 平成19年12月 ●NPO法人武士道協会設立(内閣府の認可を受ける)
- 平成20年 1月 ●武士道協会発足記念講演会の開催
- 4月 ●協会ホームページを開設
- 5月 ●勉強会「小野塾」開催 平成21年2月まで、東京で5回、京都で2回開催
- 6月 ●第1回「講演会」(東京)開催
- 8月 ●広報誌「武士道」創刊 今号で第5号となる
- 9月 ●第2回「講演会」(京都)開催
- 11月 ●第1回シンポジウム(東京)開催
- 平成21年2月 ●会員(鎌田 敏様)による「勉強会&会員相互の懇親会」が開催される
- 「鹿島で武士道を広める会」発足記念講演会の共催(会員:中島誠吾様)
- 3月 ●第1回「育児教室」(京都)の開催 第5回より名称を「人間力向上セミナー」に変え
その後、毎月開催(本年6月で第15回を迎える)
- 5月 ●名古屋で育児教室開催(会員:山口様主催で名古屋の有松幼稚園で開催)
- 第1回協会認定「定期講座」を東京・京都にて開催(以降、9月まで毎月開催)
- 特別協賛委員制度の発足
- 9月 ●「李登輝氏講演会&歓迎レセプション」(日比谷公会堂)東京JCと共催 ◀個人:652名 法人・賛助:21社
- 11月 ●「坐禅研修と和食マナー研修」(京都天竜寺)開催
- 「京都大学武士道サークル発足記念講演会」の共催(会員:加藤駿吾様)
- 12月 ●武士道学校の開校…2泊3日の合宿研修&成果発表会(会員:関口忠相様)
(会員有志から支援金を頂戴して運営)
- 協会認定の「特別協賛委員」の23名が誕生(本年6月現在26名に)
- 平成22年 2月 ●協会設立2周年記念シンポジウムの開催(東京)
- 3月 ●第2回協会認定「定期講座」を東京・京都にて開催(以降、5月まで毎月開催)
- 5月 ●特別協賛委員第1回会合(東京・京都) 地区委員長&副委員長が選出 ◀個人 747名 法人 賛助:25社

特別協賛委員制度

広く武士道精神を伝えていくために、協会の会員で、一定以上の継続研鑽—協会認定講座に参加(もしくはそのDVD視聴)—を重ねていることが認められる方を、「特別協賛委員」として認定いたします。

認定された方には、認定書、協会講演DVD2枚並びに協会ロゴ入り名刺の台紙を送付し、当協会ホームページ「特別協賛委員一覧」、会報誌「武士道」にて公表させていただきます。

詳しくは、事務局までお問い合わせ下さい。資料をお届けいたします。



編集後記

広報誌も今号で第5号を迎えます。住みよい世の中にしたいという願いで設立した当協会ですが、相も変わらず毎日飛び込む暗い「コース」難しさと、力不足を痛感し、反省する毎日です。

子供のころ、悪いことをすると、目上の人から、「お天道様が見ているよ」と言われ、知らず知らずのうちに、善悪の心、自制心がはぐくまれてきたように思います。

しかし、今はそのお天道様がなくなり、日本人の価値観も人に見ていないから、法律に触れていないならば、何をしてもいいといった風潮に変わってきているのでは。

果たしてすべての日本人が、そのようになってしまったのでしょうか。否、まだまだ日本人はお天道様を見ている人のほうが多いはず。

鍵山理事が、「世に悪党があっても、「善党」と言われるものはない。悪人は徒党を組んで増殖するが、善人は、恥も外聞もなく周囲の人に頼ることはしない。だから団結しにくい」と言われた。善を積み、模範を見せ、社会を感化して、悪人を育たなくするところに、協会の使命があるように思うのです。

武士道協会事務局

〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 株式会社PHP研究所内
TEL(075)681-5514 FAX(075)682-3565
URL: <http://www.bushido.or.jp/> E-mail: info@bushido.or.jp

特定非営利活動法人 武士道協会

- 武士道第5号
- 平成22年6月発行